

老人調査の解析と評価……………厚生省 村井隆重
 生理学からみた老人問題……………熊本大学 緒方維弘
 老年者の宗教的態度とその規定素因……………大谷大学 白井二尚

これらの報告および講演は次のとおり大きく分けられる。

- (1) 社会調査に関するものは3題、ただし、シンポジウムおよび特別講演を含めると5題。
- (2) 施設老人の精神的、肉体的障害ならびに生活状況の調査に関する報告はもっとも多く7題。
- (3) 老人と住宅の問題について、施設建築計画および脳卒中と室内気温との関係に関するもの各1題
 (ともに、日本大学 木下茂徳報告)。
- (4) 人口学的研究としては人口問題研究所から次の3題。

日本人男子の簡速労働力生命表——昭和35年……………河野 稠 果
 老年労働力の動向と構造……………黒田 俊 夫
 内野 澄 子
 中高年齢人口の流動性……………上田 正 夫

- (5) その他には、純医学的なものとして「老眼」に関する研究と、老人福祉への寄与としての大学解放に関する報告が各1題。

(上田正夫記)

第19回日本人類学会・日本民族学会連合大会

標記の大会は、昭和39年11月28日から同30日までの3日間、京都市の京都会館会議場において開催され、本研究所からは、篠崎信男(人口資質部長)、小林和正(資料課長)、青木尚雄(人口資質部能力科長)の3技官が出席し、篠崎・青木両技官は次の演題によって研究発表を行なった。

Neo-Vital Index よりみた主要諸国の人口活力の動向……………篠崎 信 男
 日本人の出生力について……………青 木 尚 雄

大会の日程は、中間に特別講演(湯川秀樹・桑原武男両氏)、各学会総会をはさみ、午前中に人類学部門、午後民族学部門の研究発表が合計68題述べられた。その概況および印象は次のとおりである。

(1) 研究の内容が極度に分化されていること。たとえば同じ人類学部門において、文化人類学と形質人類学に分けられるのは前からのことであるが、最近はさらに霊長類生態学、組織学、発生学等に細分され、しかも人体生理学一つをとっても血清蛋白の免疫化学や筋電図による疲労の分析など、特異の研究が見られはじめています。

(2) 一方、各部門があまりに狭く深く進む結果、相互間の関連総合ないしマクロ的判断に欠けるうらみが出つつあること。特に分析観察が詳細になっている反面、統計処理法が旧態依然として、むしろ混乱を助長している傾きが見られる。

(3) 人口資質に参考になった演題としては、「個人追跡法による日本人の発育の研究」(東京大学 保志宏ほか)、「日米混血児の身長と体重の長期観察」(日本医大 江藤盛治ほか)などがあげられる。前者は、いわば出生コーホート別発育曲線の分析であって、発育の幅および傾向(channel)の変化が、季節差、性差、年齢差について述べられ、後者は、特に混血児における11~12歳の spurt の特異性が明らかにされ興味があった。

(青木尚雄記)